

信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

崑崙山脈「阿克沙衣峰」(6770m未踏)偵察行 その7

ホータンの友人、アイレットさんに再会

ホータンへ向かう国道315号を通るのは、これが4回目だが、道路の拡幅工事中ということに加え、今年の洪水の影響で砂をかぶった道を雪の回廊ならぬ砂の回廊として開通させてある箇所などもあり、「こんなに道が悪かったかなあ？」と思うくらい道が荒れていたというのが感想として残る。一方、カシュガルからホータンまで鉄路を開く工事も急ピッチで進められており、既にイェチオンまでは開通していて貨物列車が走っていた。16:30、和田賓館に到着。たたずまいは9年前と変わっていなかったが、かつて飯沼さんがさんざん冷やかした売店の位置が移動していた。今日明日と連泊の予定なので、洗濯をしていると、アイレットさんが訪ねてきてくれた。アイレットさんは、2000年、2001年の遠征の時に、ヌルさんの斡旋で我々の通訳を努めてくれた。彼が通訳としての仕事をしたのは、我々の2000年隊の時が初めてで、彼にとっても一つのエポックでもあったからだろう、2001年の登頂成功をことのほか喜んでくれ、後年信高山岳会の旗を模した絨毯を特別に作って贈ってくれたこともある。本職は和田師範大学の数学の教授だが、かつて愛知教育大に留学した経験をもっており、日本語も

喋れるので、夏の暇なときには今でも旅行社の通訳としての仕事をしているのだ。

今日は日曜日、ちょうど日曜バザールの真っ最中。まだ夕食には早かったので、そちらに出かけてみる。この喧噪の世界はまさしく西域のエネルギーそのものである。果物、野菜、衣類、生きた動物や鳥、日用品・・・何から何まで売られている。どこを切り取ってもすべてが絵になる。バザールを歩くと、色



とりどりのアティリスで着飾った女性たちの姿が目につく。多くはワンピースでスカートの丈は長い。彼女たちにしてみればそれが普段着なのだが、赤やピンクの色鮮やかな服に、金をあしらったりしてまるでお祭りか結婚式にでも行くのではと思わせるような格好である。そして彼女たちは皆美しい。中央アジアのここには、色々な顔つきの人がいて、現にヌルさんはウイグル人自身からアメリカ人と間違えられたくらいなのだが、混血を繰り返してきたその良さが現れているのがウイグル人なのだろう。しかし、バザールで商売している彼女たちはたくましい。服を並べたワゴンの上に仁王立ちしている売り子、背丈ほどもあるアイスクリームを切り売りしているおばさん、靴下の中に売り上げを全部しまっている野菜売り・・・。生きるエネルギーに満ちあふれた人々。子どもから大人までみんな必死にそしてひたむきに、なおかつ明るく生きている。

夕食は、そのままアイレットさんも交えて町の屋台へ繰り出した。昨日、魚が美味かったので今日も頼んでみる。今日は鯉だったが、ウイグル流の魚料理も捨てたもんじやない。もちろん、新疆で一番おいしいと言われるホータンのシシカバブの味も健在。辛

さ一杯の野菜や豆腐の料理も僕の口には合う。アイレットさんはかつての登山隊のメンバーを一人残らず覚えていて、話は弾んだ。2L入りの生ビール（これがペンギン型の容器に入っていてなかなかユニークなのだが）があつという間に2本空になった。

日本ではまだほとんど紹介されていない「ラワック遺跡」

8月2日 今日には久根さんと二人で早朝の散歩。和田賓館の筋向かいの小路を入ると以前は、古い煉瓦造りのウイグルの民家が軒を並べる住宅街だったのだが、ここにも今は都市開発の波が押し寄せていて、かつての町並みはごく一部を除いて瓦礫の山となり、その先は公園として整備されていた。更地となった所から町を眺めると、あちこちで朝早くから槌音をたて、大型クレーンを使って高層アパートがいくつも建設されていた。カシュガル同様ここも伝統的なウイグルの生活は少しずつ消えていく。歩いていたらキ



ジ（これは朝のお勤めの健康的なそれなので、ご心配無用！）を打ちたくなった。かつてのホータンならそのへんで、というところだったが、公園には「公共厕所」がちゃんとあった。入ろうとしたら、入り口の前にねそべっていた女性がすっと起き上がり、早朝だというのに使用料をちゃんと5毛取られた。

朝食後、今日はアイレットさんの案内で和田近郊の観光に出かけた。最初に訪れたのは、ラワック遺跡、ホータンより60kmほど北方にあるここは、2001年に発見されたばかりとのことでまだ一般には広く知られていないようだ。入り口で一悶着。バイトか何かで雇われた青年が、横柄な態度で見学は駄目だという。アイレットさんが彼から管理責任者の電話番号を聞き出し、まくし立てる。自らを「スズメ」（ウイグルではおしゃべりという意味だそうだ）と自認するアイレットさんは、こういう時には、頼りになる。最初はなかなかオケーが出ないようだったが、最後はうんと言わせたらしい。顔をつぶされた観のある件の青年は、しぶしぶ我々を中に招き入れたもののふてくされた表情で、絶対に写真は撮らないようにと念をおす。

このあたりは6Cごろホータンの町があり、中央にある大きな建物は、当時の町の中心にあった仏教寺院の跡だということだ。まだ周囲を整備途中で、ガイドブックにも取り上げられていない場所だったが、それだけに質素な土色の遺跡は、沙漠における時の流れを無言のうちに語っていた。川の水流の変化とともに見捨てられたこの遺跡も、インドから仏教が伝来したときの中継基地として、往時は巨大な伽藍が立ち並ぶ壮大なものだったのだろう。砂地の歩きにくいところから急になんだか足場がしっかりしたなと思ったら、気づかないうちに実は寺の外壁の上に立っていた。ヌルさんが「大西さん、罰金者ですよ！」とおどけたが、実際その通りである。文化財保護の観点が少しずつは浸透しているとはいうものの、まだ確立していない場所で、そのつもりもなく遺跡を粗末にしている僕だった。とはいえ、写真は駄目だとか、おまへたちは入れないとか、入場チェックは厳しかったのだが、入ってしまえばあとはご自由にというおおらかさ。現に我々のあとに入場したウイグル人なんぞは、遺跡そのものの上に登って雄叫びをあげている始末・・・というわけで、入り口にいた横柄な青年のお役所仕事ぶりに、相変わらずの中国を感じたラワック遺跡だった。